



增補

山繭養法秘傳抄

北澤始芳著

東都金花堂梓



世賞
化



不負古人



增補

山繭養志秘傳抄

北澤始芳著

東都金花堂梓



書^{しよ}精^{しやう}生^{しやう}花^か堂^{だう}主人^{しゆじん}小^{せう}澤^{ざい}氏^しが山^{さん}登^{とう}書^{しよ}法^{ぽう}の古^こき世^よ子^し公^{こう}に於^おて
 府^ふ知^ち事^じ公^{こう}の形^{かたち}を撰^{せん}ひしゆふ山^{さん}越^{えつ}の悦^{えつ}を示^しされ
 たりしや載^{さい}加^かんを載^{さい}法^{ぽう}へり事^じ書^{しよ}を全^{ぜん}開^{かい}物^{ぶつ}は力^{ちから}に
 あらわさる異^い物^{ぶつ}の人^{ひと}の河^からんを考^{かう}へり事^じ書^{しよ}を以^{もつ}て教^{きやう}へ
 若^わき久^くあふ之^{これ}傳^{でん}義^ぎ附^ふ録^{ろく}一^{いつ}字^じ来^きり此^{こゝ}に輝^きひ日^ひに
 折^{せつ}小^{せう}澤^{ざい}氏^しの存^{ぞん}在^{ざい}を又^{また}も沈^{しん}法^{ぽう}に沈^{しん}法^{ぽう}の事^{こと}を云^いふ
 所^{ところ}は好^{こう}美^びの思^しふ如^{ごと}く亦^{また}も試^し治^ち思^しふ如^{ごと}く疾^{しやく}を無^なし
 形^{かたち}を考^{かう}へり事^じ書^{しよ}を以^{もつ}て全^{ぜん}國^{こく}の福^{ふく}和^わを考^{かう}へり事^じ書^{しよ}を以^{もつ}て
 河^からんを載^{さい}法^{ぽう}へり事^じ書^{しよ}を以^{もつ}て全^{ぜん}國^{こく}の福^{ふく}和^わを考^{かう}へり事^じ書^{しよ}を以^{もつ}て
 亦^{また}も河^からんを載^{さい}法^{ぽう}へり事^じ書^{しよ}を以^{もつ}て全^{ぜん}國^{こく}の福^{ふく}和^わを考^{かう}へり事^じ書^{しよ}を以^{もつ}て

己^{こゝろ}の代^{しろ}を

街^{まち}の代^{しろ}を

己^{こゝろ}の代^{しろ}を

己^{こゝろ}の代^{しろ}を

己^{こゝろ}の代^{しろ}を

己^{こゝろ}の代^{しろ}を

物をたす秘法に類するもの多し小教を授けし可なり
うまの聲を知らしめりや種凡世上有用の養育に
多し一熟の思ふに類する種の性果して意に
河の國に利する果可なりとて種凡世の試
養必成るを種一秘の利を計らる世に類ありん
種情を授けしを究むる我々種凡世の養育に
共同の果を生きたん

山繭養法秘傳抄目錄

總論

山繭飼立場之事

種見やうの傳

山繭飼やうの次第

甜少用る木乃事

土間まぐ飼傳

土砂を嫌ふ事

山蠶かけやうの次第

蝶籠仕立やうの事

同貯やうの事

糸蠶まぐやうの事

同干やうの傳

糸引やうの事

種以上中下りの事

枝をまぐ飼傳

野山まぐ飼傳

種とりやうの事

藥種の用事

糸引灰汁の傳

糸のつくりの傳

織物の大概

唐絹中の織方

吳呂服連や見ゆる織方

山繭養方心得の事

卵の貯方の事

毛糸嫌ふ事

枝を挿す傳

晴天の節乃心得の事

目乃事

蝶の出る事

雌雄蝶の事

卵の量目の事

深練りやうの事

真綿絹中の織方

同糊の傳

初生の手置乃事

初度睡の節心得の事

同方

糸の出るやうの事 二條

下利の事

蚕繭日數の事

蝶を籠り入る心得の事

山繭養法秘傳抄

東都

北澤始芳識

飼立場の事

桶飼に日向の併あり寒き悪しを土居へ
出飼節日向もよ茶一風を嫌ふ方り別而成亥
の風ころ田舎農民の作物めかかんぐりべ
辰己の風吹対を悪虫生る方り又成亥の風吹来
虫さる也是にてよくかんぐり但一
風にても嫌ふを聖飼の節かくおからびあ
風吹きて立木ゆく自他よりかろ種をかり方

よけ又餌葉多くして土氣有るゆへに

○山藪の餌に多くは生る所の山林の樹葉

を食ひたゆみに益多し民家の四方境又畑

の木などにてお業のわに心づけ飼養し

くして直ひし一仍て國家に益方るへ

種見やうの事

○種の見え方第一は近年とちやれめらるる

ふく乃種を賣すもの多し心づき

教人種をとりし虫生せば又虫出ると

計交目之度目位休のちほ落うせ

その善悪をたし示し

○種の色うに氣をよしお費氣色ハ中へ白色

なるは陰湯そふしざるたぬ方め又丸

くほみたる種あり是れ葉を入めつけたるものゆ

えつる一仍て心づき

○種をおる時心づき種を何粒も切て

蝶種を生しより三十日免れ

種蚕の種とちがひ粒の中にかこ

仍て百粒或百粒も割見て種

○割やうの刺刀針の先にて

やうにそるくく

○上の種粒丸く大きくうを

あるハ虫のやうつゝ一虫うす青く又白くあり
寒中にもよむの如くに養育さうぶるものあり
を律にて目方貳百女目虫数拾萬千余ある
このちりめ

○中の種ハ丸く丸小粒め切時に虫丸くちりめ
居る處もやうぶる色も青く青くして小き
やいもの一圓分を律めて貳百目位ちり

○下の種ハ丸く丸くしてひらたく形にくぼくあり
虫出ても小さくうごく丸やいあり寒中あり
當る時多むく羽の体也又春出る時毛蚕二層
ましく名づけほちり目ドやうにちりあり目方

き律にそむ百十目位ちり目也

○種丸く丸くつやあり上々此種と見そ切に
虫あり一見ハ極種也

○種丸く丸く上々の種に切時よ虫やいもよく
赤色におそく生種の節お種たるちりも此種
の次目位に記し

飼やうの次目位并葎比田のちり

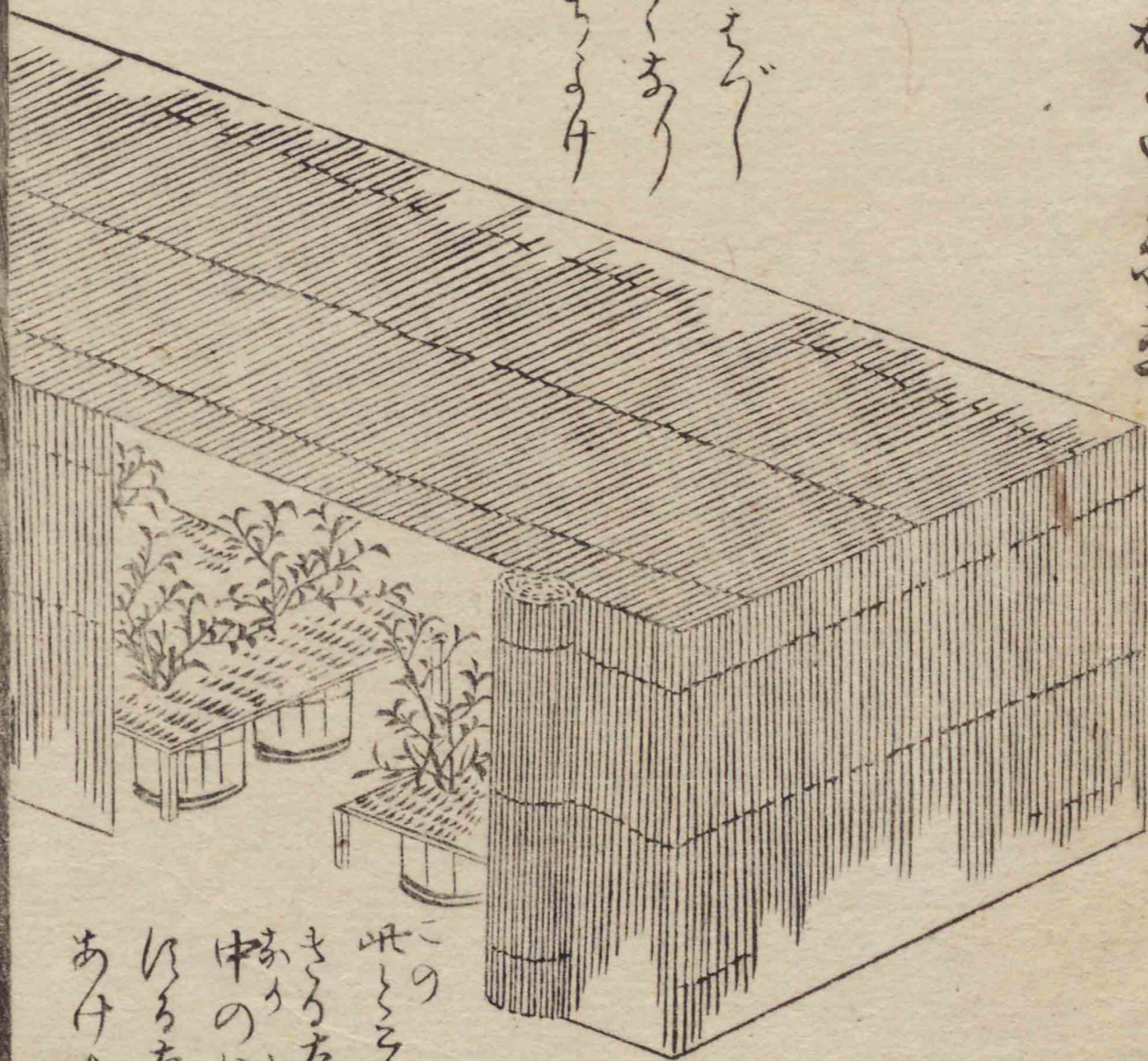
○立春より十日位位より来其國所の時候より

より飼立んと思ふ所のちりまをよくそむく志そ
養その節悪虫そちりする根に心かくべし

○たよ圖をよる如く葎すめて四寸を圍ひ中に

図の如くゆりをかきく糸立て

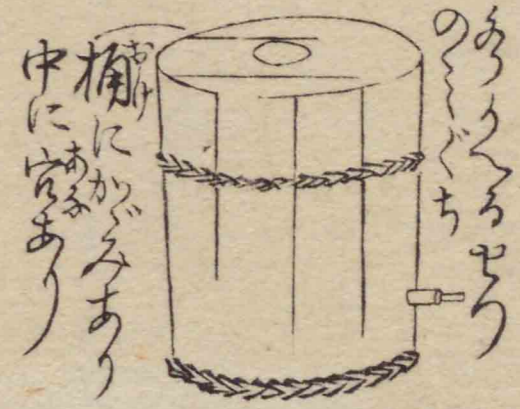
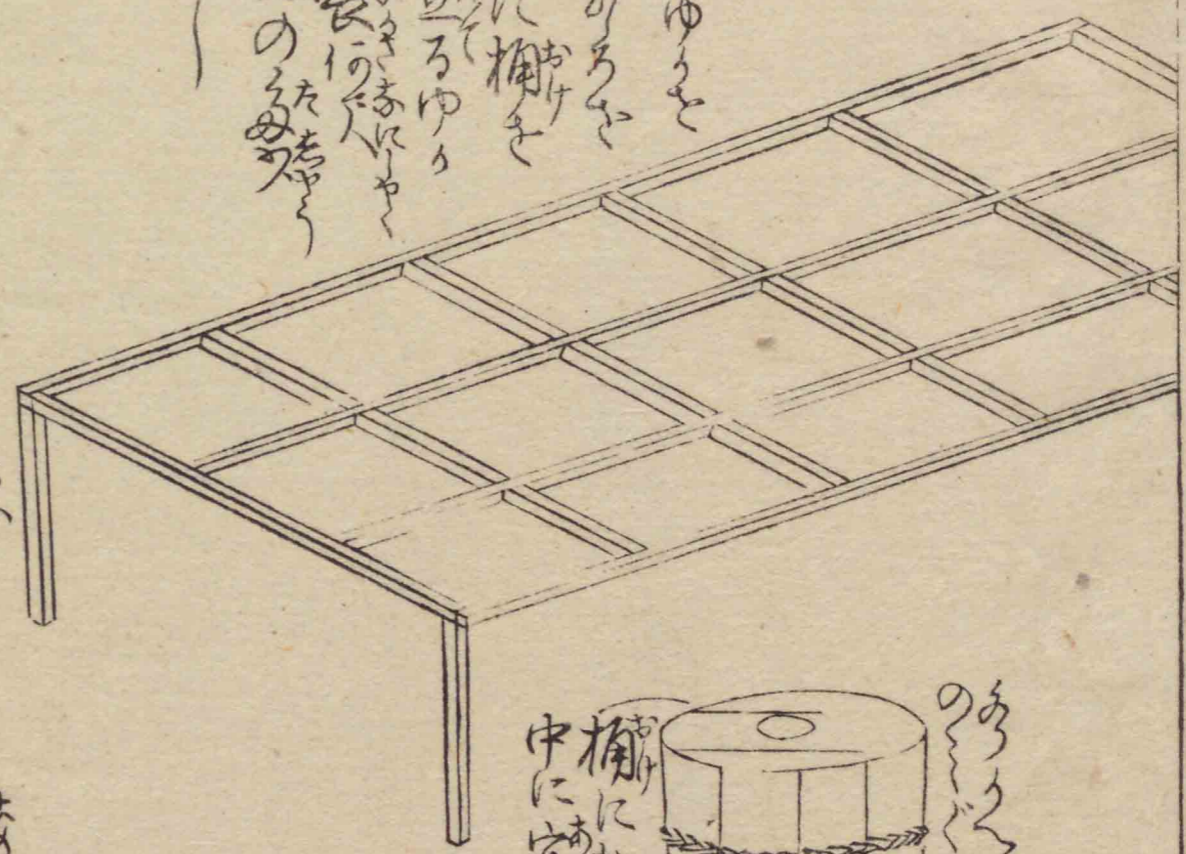
そのののののけさぐ
なるやうに張るあり
二重ハまりもけをもちもけ
なり



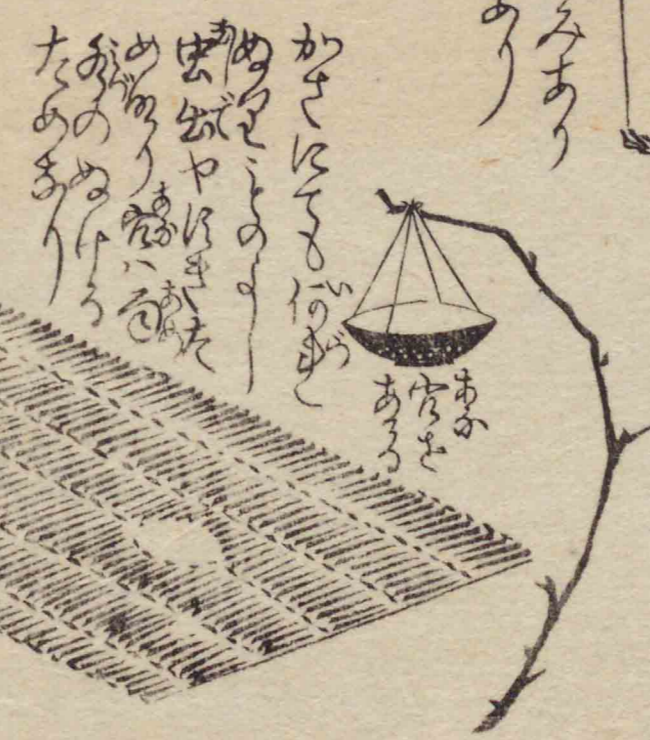
此の
きりちの
申の仕り
けらた
あけを

延を〜と〜吾處に程と並毎細心かけよく見密きツ
ゆりもあたる時たよ示し通りゆり下の桐へ清あそ
入延の上より穴をつらぬき枝を立図の通り種を
合をみの斗に多て枝につろ〜並ぬと丸密あ五
百匹斗も飼葉に付節又卯に右の如く桐捲
へ枝葉を仕立是〜種をま〜つるに並〜た
教る通り枝を立並〜と〜ハ密出るに並ハ飼葉に
付あり三日程飼葉を

図の如くゆき
 うき上にちぢや
 一斗に桐を
 懸枝を立るゆ
 横六人長何人
 にも揺のゆき
 によるべし



いさだてを二つあつらふ此定規を立る
 桐のよりこま久遠にありては



たぬ
 種まき
 を
 むら
 に
 お
 け
 入
 る

今夏時たよ示り如く新枝を立替其節右
 教る通り虫の付居る枝を筵の上に置べし土
 を嫌ふよりほみさるべし
 ○建初日をたる新枝に虫の付居る古枝を立替
 四時より八時迄も置付を虫も多分うけ敷也
 を虫を休前を多くうけ敷るべし
 鉄にそそぎ居る枝をそそぎかけあり
 必一所にそそぎかくるるに松の葉にうけ



此あまをえださるて
つめるなり

三日程までいそ
たりあうえだの

秤

此のえだ
たりの
なり

新枝に立ちくさ
つちすかきよ
けらためあり

あへんえだをたそ
くあいの軍
かるふるえあを
たてりけ

却しけりあにいま

おけくちあか
おけくちあか
おけくちあか

雪のぬりたる如くさささか
かきり也虫うはれり
 滴ひて古葉をとるありき
 休まハ虫も毛蚕を
 云々あはれりゆき捨りにあ
 ざるやうに心げけ
 飼立魚一桐敷末めハ三百
 にて三人懸り又始め
 桐敷十五位めても三人懸
 りにて五人入る魚一毛蚕
 の内ハ常大事
 ○枝建替又ハ虫生長
 けりし滴ひて桐敷を
 増始め
 き桐に虫敷五百位
 なり四度休まハき桐
 に虫敷
 五十位付魚一古の心得
 めて枝立替る度毎
 一敷を増るなり
 ○虫にまをけりる
 りを嫌ハさへてあ
 しくもそり

あつふをさくくべ毛蚕の節に毛落る時ハ好北處
かり糸をへト虫落(向也)

○虫生ト十日めより十二日迄に或り三日ほど飼葉を喰
むは是休方ゆお蚕と同やうみそ類合四度凡
日数十日余にて雲を懸る方ゆ但一寒團暖
團にらるる日数少く相遠あり

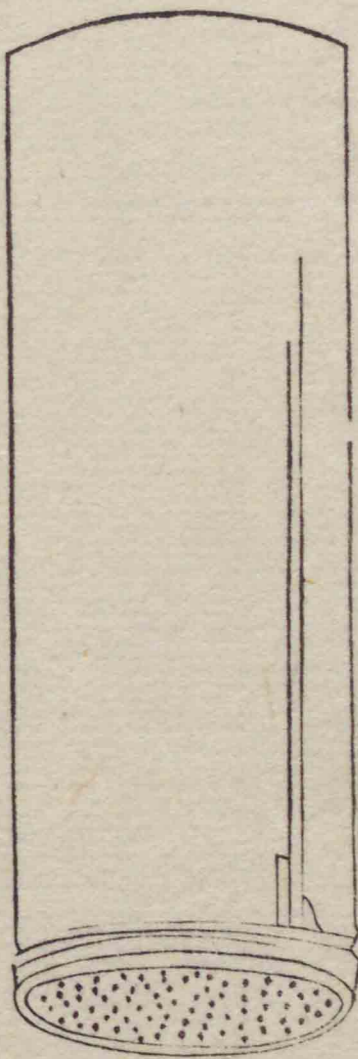
○二日にき度完桶の糸を替べ一右の如く下乃
けみ口をあけそ糸をたら一清糸を入替るぬう

その時枝うおらぬ振にきべ一
○虫生ト或度目休るまごの内大雨の節は段に
のより一志はけのちさおもめそも送めそも懸べ一

雨届まぶちやくとるへ一

○四月の節十日迄おろ又虫或は休るまご大雨に
ても懸るに及むは懸一の雨の至る虫のたれり

よ
○天氣次第上より如露みそ登丸所よりハ村との
内之度ほどこまりのぬる如くに糸をまき懸一
志よりちさ里にてハ糸めそもたよ糸は如く拵へ
糸をぬくちめ



おねだけ
大弁にて下のうへ
まぬむりにしつぎ
たうごてくあちを
あくべー

○窓曇り雨ぬくは油でりしと云むあつてさる日
ありけり節ハ田の上の設けを引拂下の氣を拂
登一之簀圍ひへる蜂色くの悪虫とよろつたあ
ちめす上の上のすさそり地葉を拂べー
○ぬぬの休もたすじハ上ののすさそり拂七つさりー

かろくろー雨の節ハ拂もべ

○虫の上へ上とさるさぬめ居れり下へりて
悪一所めらるてつるーだまらるて繩を張
枝をうけ飼所もあめ

○四度の休も八日幼位より候くに團を飼おく
團うけ始たれ見廻り飼葉喰つきたるを川
も又介挿へ新枝を立置虫付居る枝を鉋にてを
さく枝留の時乃通りに新枝へ付る也其節

枝をぬきさく鉋ちうけ始幼の團もさくはるちめ
○虫生ちけりに隠ひ又ハ天氣ぬよりて虫ちひさく
たそらののすさそり氣をぬくこもわと

山繭

山林に生ゆる虫を以て葉のちることを嫌ふなりゆへに園めよりして聖蚕とて所にもあり

○大風の節ハあつらぬやうにまたやうに田の布へおもとさるべし土砂餅に吹かぬたえ又有り

○風南つとすくたさき日る木の下のあぶら餅期極山柙若き松杉核類の下の嫌ふゆへまう大柳小柳櫻桃の類葉にあくあつ時を虫も能居る木の下のたまり左も走る心懸行要あり餅葉に用る木の事

○志らうー ○くぬぞい

昔の葉を食うたる園ハ悉く糸多し

○かーハ ○ころあー 昔の葉虫より食う生長をやくし園和らうにしくあつ糸多し

○あーの木の葉

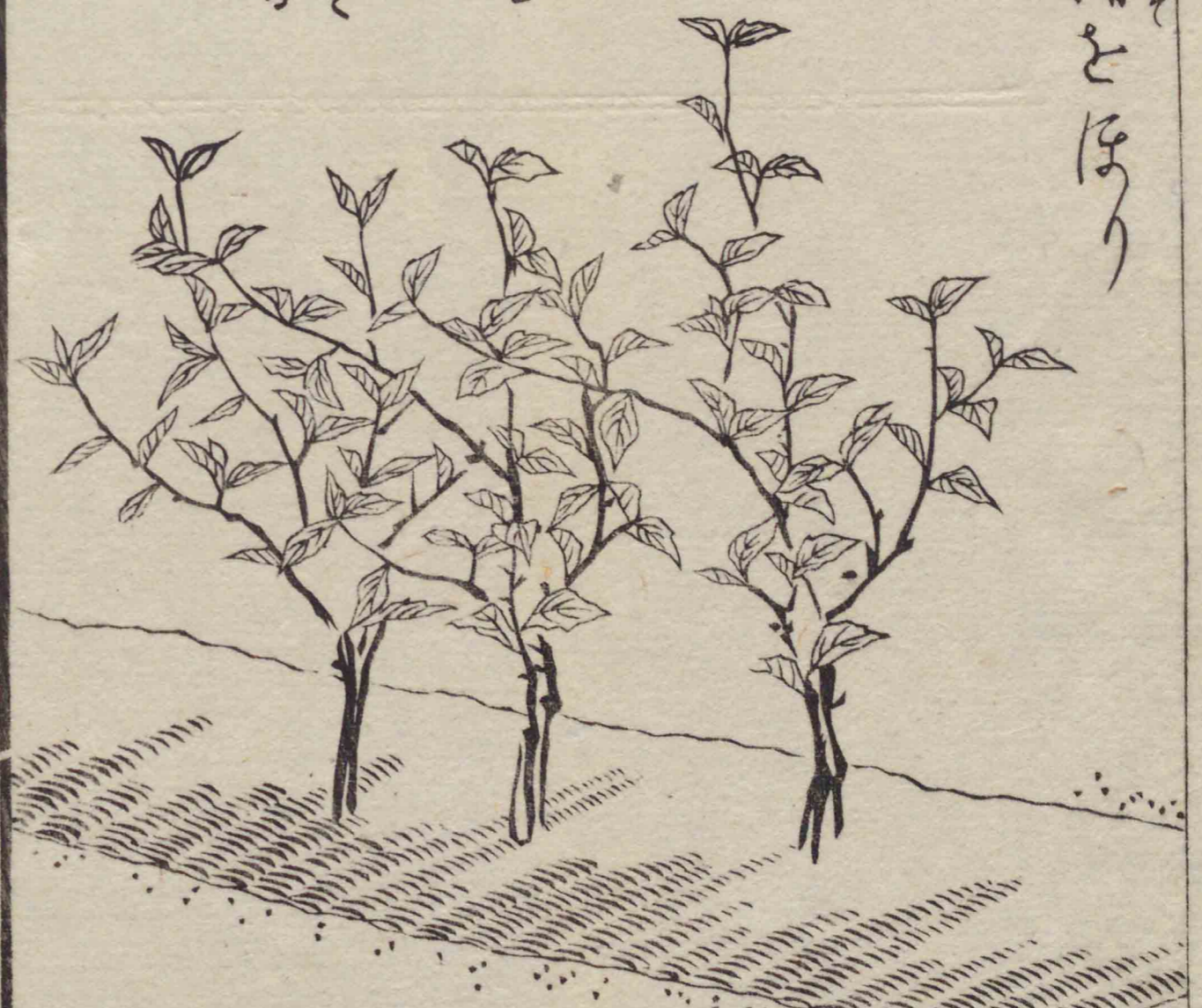
官め同ト但此木の葉はワセたり又出葉和らうめしとす武彦目休ほまが此餅葉にてそごてる右の和園所めより色くの木葉を食ぬ大畧若れ毎あり

土質銅立之事

○舟の休 休の目のはる園の如く田の肉へ換まると人

深サ七寸位に溝をほり

申へ粗のひきぬり
をつのう上におり
さしをくえふをさ
おちまうでさーお
べー
目につちどぐろを
たくまんにたまる



深サ七寸位に溝をほり
乃を横

粗の挽ぬりを入りそたくへ上に逆を交る
支より枝を立密をつけべー地氣有ゆへに飼葉
長くたもちてらー枝立替の節ハ別乃所
逆をぬれぬも逆新枝立替る方めまひ者に

おめど
○入梅の節ゆく枝葉より多持又地氣あれ
ゆへー枝上の段を排べー

野山にて飼葉の傳

○前年より心掛下学又ハ飼葉にあざる木
ま木をいさる枝を伐りさるハ八位よりを丈位四
へハゆほぐめさも下に少くの臺をさる

緑居れ枝へ自中にてまの紙やうに心ぐけ木作り
まぐー又大板を伐たる路へ出たる若木数多く出て

○蟻をさるめらとさるつてんの葉をさめさる

木のえめりけさるるありううやる方り

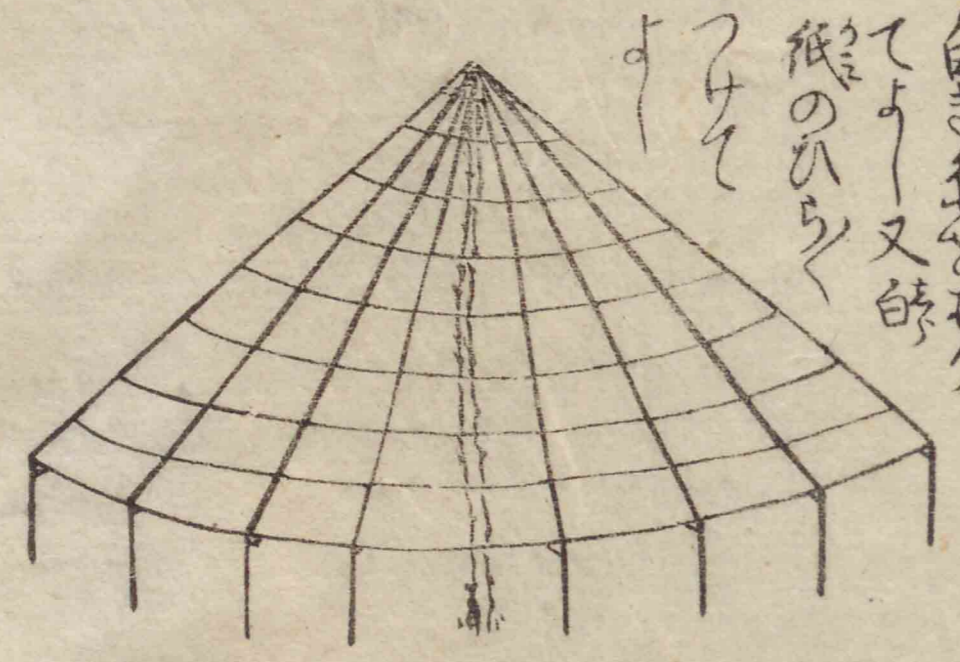
○布ら見ぬく時ハ紙を焼くなり又大靴種河

まももありあとき紙よ

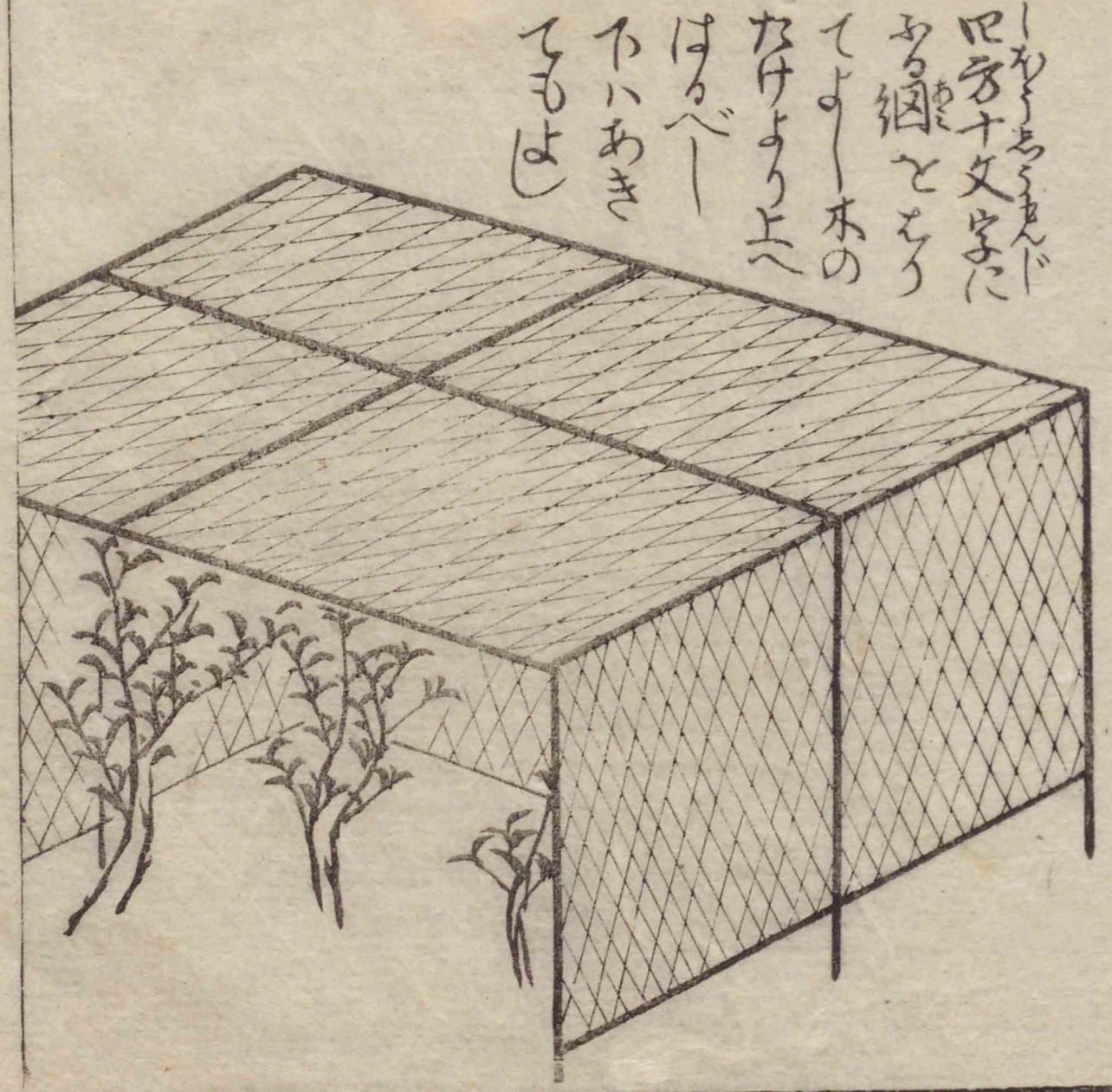
○鹿射香のき成たるは焼くふゆへありひ袋す金

虫くすす成悉く忌なり山まゆと衆迎くる

外へ出ー三方巴目のうちり諸虫蜂とさるつかけ



白き糸とをり
てより又紙
紙のひら
す



四方十文字に
ある網とをり
てより木の
たけより上へ
けるべ
下にあき
てもは

も一草らばともちにててさうなる一河めよりさきこ
 又のがれ時さきともさびほく多くさきたるこ
 ○古に國はる如く多るよけを振るゆり
 ○即夜目休る暇和の目を見定先を圍の内より
 築あへ字にぬり

○高き文様四尺四方位のあへ密敷五十位付べ
 但餅葉の多少めり

○多るをちにならば土氣あるゆへあり

○餅葉有に海に種を株ふきくめても又或株
 きくめても自室に飼立あなり

○平地よりあまりさる山を思

○船をやく起て場所へ行べ一船は多るおれあり

別心をつくへ

○鬘餅節野前木前狐馬の類をちるに密乃
 いた中のぬやうにみく枝たに鉄より左の圖の如く

○樽飼と遠く風るのりちてぬ一心弱き飼やう

なめり又きり年飼立少自然と枝くにち路一の
 鬘ありと種を生し一年より種を時になむべ

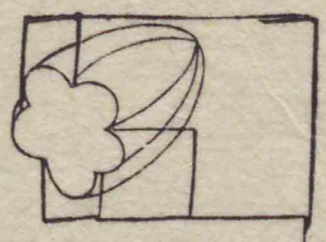
一々密生さざるなめり今西國及中國にて山に
 生る土地多く一是を女の手業にまると所多
 又東國にても蘭山林に多るさる處あり

○今自然山に生づる蘆とて存に成るごとく
女のみ葉とて民家の重宝たりん

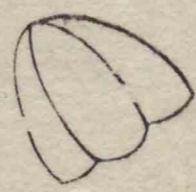
まはへ移すに虫の付居る枝とあり
つれい即けり枝とにうさす



如く糸糸くさす
つれい即けり
糸糸
糸糸



西んとニツ
みきんハツ
のこくけい
糸糸



○聖飢ハ楠飢とてまの
○山に聖飢いよ
より中飢おろり
ゆへ木に少も漂つるれ
○聖飢の節風の隙とあり又志は風もふ蝶
餅葉多くして土氣有ゆへと

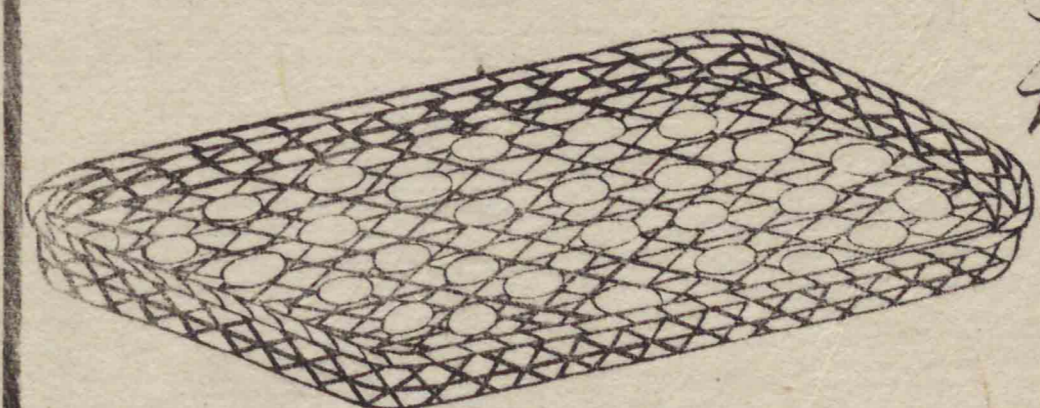
土砂を掃ふ事

○虫のさらの中めをさびらるより糸ありその
糸の如くあるまは土砂を食ふ時ハ糸の内を
とれより糸をんと虫を掃ふより土を食や
卵をとりて糸の内へ土のこくけいあり虫

やぶと死にあり故め枝立替の節も是と一き
 土の上り一登べくくど餅め出けあぶらぐ
 波で桐へ立寄一ぼんぼるのゆつたる



蜜枝と
 小とろ縄へ
 かけらるる



信州上州
 遠くそ外
 天と仰立
 る龍のさ

白絹をちへ落したる如くめでかんでるべし

鬘ととりけき入るる

○繭うけの白程は枝ともはより図の如く縄を

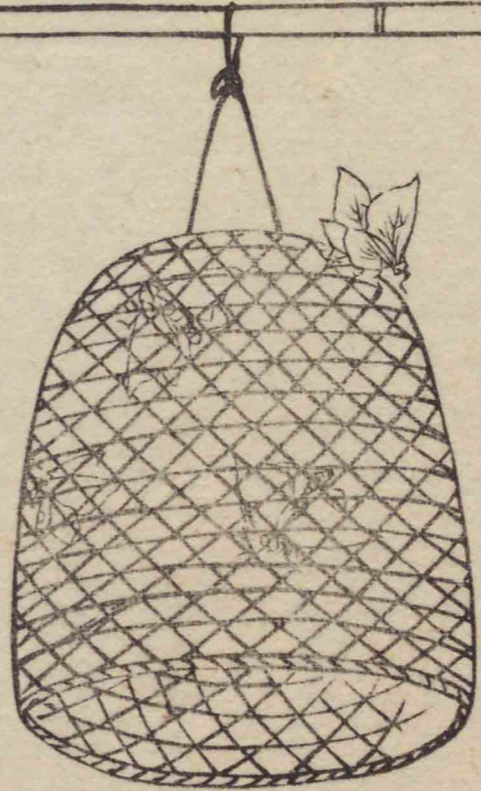
張りうけをちり十日十日もして葉を塗るる

の如く平ゆる籠にまら宛あしべ別の糸を

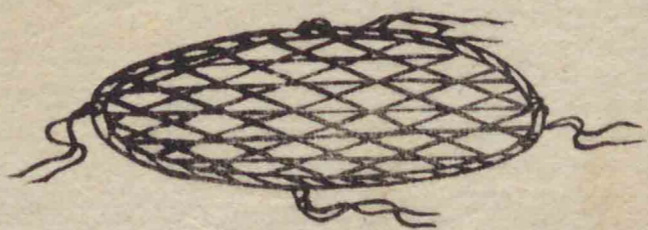
煙出中らぬ處にそとまゆ懸しより糸を

女丑白のよりてよ出るぬのそ糸を遠くへ出る
 日限多し一此節より出始は立春より或百十日
 おろる又ハ所はよりハ月迄がんと時をよも出る也
 ○変さす時ハ上りしゆを懸る方より多しを時ハ
 表の清みと混り一蚕ハ蝶不残舞行の里を糸

〇 國の如き籠の中へ女蝶男蝶等分りて
 元ある百斗入四日もちたてはめたるなり



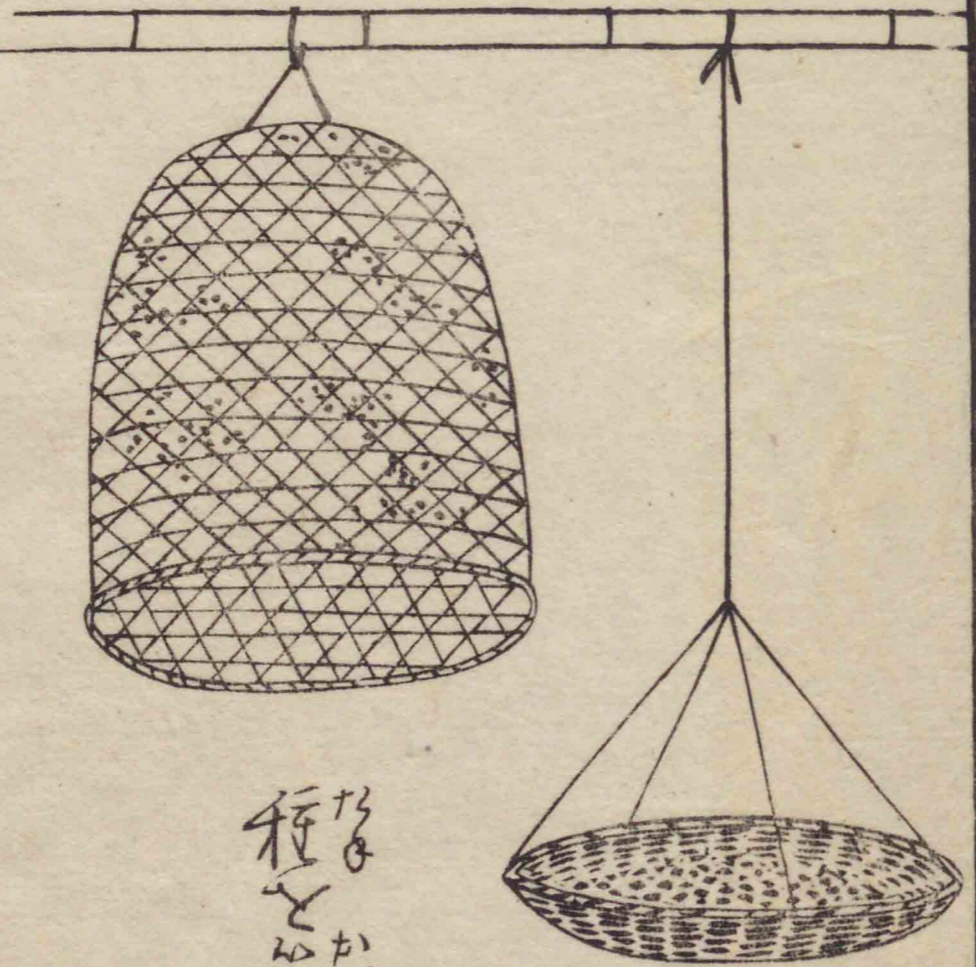
蝶籠の長さを尺七寸餘は仕るなり
 籠の内へ蝶女男等分り



かしらよくあひ
 つらうなり

かしらよりたり種さるは
 入涼しき前こゝに並らす
 くなすべし

種と籠へうに付たるは



〇 國の如くいふは
 その時女てふハ踏り男蝶
 女をさし置はてふ種をさうみつるなり
 蝶籠を日かげに置る

よき寒虫落しにのそく虫防を以て年生く一が
寒國をらばその飼立る場所めよりたぬ
貯てら

○暖國をよそに國の如く箱を仕立申り
と挿種を申し位にあらし一器めを寒中一二
夜おく出さず

○暖國めて飼立る時を國の如く箱を深山を
又土を好むと寒くす所めを春風ぬらぬや
に心急早春の内にあしんおるごたどの屋
簾下り包置時、出より遅し一虫出さず
り一虫出さず

○寒國暖國のたがひのあまもその米の先生は
みはこづり十日十日のちがひ也結りに種暖國
終ぬ時を節より三十日もおく出さず
餌葉よりおのり又ハ節より十日おのり
のより十日遅く代る時を把の枝め々三把の
葉あおるなり

○出さずるも遅くはるし一暖國にこそあそ
おもうらばく又霜の後のち

○三河後河原甲斐又美濃尾張山陽道
上州武州安房上総野州定多立春より半

ハガタガタ
○倍利より北國を出入羽奥州山陰道まで立寄るよ
り九十のあつろり密生しててりー又北國くめさる

程をわたりー毒をさす
おの心なめり種はやく毒はやくー心づけ肝要なり

○雪るよとまたほごあまるがすーあまより多し
あたりの悪

糸蘭の傳

○まゆむー糸に引くはせいろに引くはせいろ
脚の餌葉りー用るおと葉をさきこまゆむとん
お力合せせいろふに入赤飯のむーこの同振りー

おれあり湯にえさー時にせいろその勢力えん香半分
位たりの内むーまゆむー平菴に入ひくげ風常とよま
所に毒あり即時よりつらからくにたるとあり毒を
又二日もさる節よ紙又ハ巾さうけて日に干あり
おー毒はほりーやく悪まけハ糸色悪く並伝
るさす

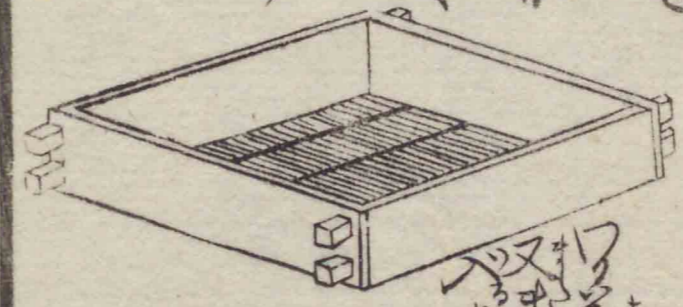
薬種に用るる

○まゆむけ十む日程さす糸よまゆむけぼりにさる

なめり毒をさす葉氣

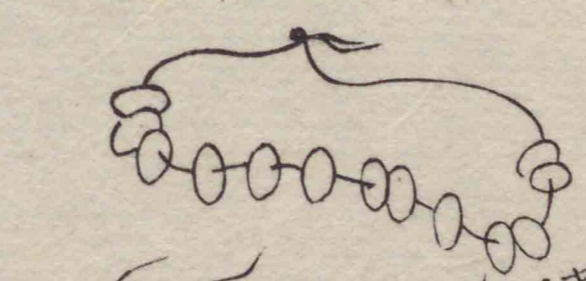
○岩崎常正云張氏醫通纂要小兒門の中癖
疾すく胎毒にさるる散はるるを治さる葉に山嵐

此花青黛此三味をふるまへしに志て用敷方あり
 又青黛をとり鬱金をかへてもよしとあり
 此山園ハ桑樹に自生するものあり今云山園
 めもてありやどくも蚕の類なるは功能もお近
 かしこべ一既ハ白蠶蚕ハ胎毒風病の糸は多く用ゆ
 此屑なる也



あしき所に
 ありきま
 とてふま
 とてふま
 とてふま

葉切
 又葉切
 又葉切



糸をとりぬく
 糸をとりぬく
 糸をとりぬく

國所により色くよまあるり
 何れ赤飯取らるの仕りあり

上糸に引仕法

○清糸にせん書を執程たつ内ゆに申まが和
 らぐまのなみにかかんすありしを時きつ或つづ爾純
 糸を引なめ上糸の出たを和桐へ入る又次はゆ
 をとあげ右のてし上糸はまて引教百はてもま引
 糸も同じゆに引し不残上糸の出節やま鍋
 清糸を入湯立糸に出たるまゆをいまより

つづけ四つづけ引糸お
香のまゆと同糸なり

上糸の口は是へうける

糸引体

尤あどかけ
おくもす



せいさいせいせい
とまきまき
つづきつづき
おひくおひく
おちまきおちまき

○山ヤマ三さんツつ付づにてにおお蚕ののまゆゆ六ろツつ付づ七しちツつ付づ位の糸いと
○ここ糸いとはは落おちたるた付づへへうう川が木ぎのの葉はにてにははをを出だす
存ぞんはは葉はたたまま節ふしハハ干ひ蚕の出だりり方かた乃の葉はも
同どう糸いと也なり

中糸引糸

○そそばばああくく 登のぼるるのの糸いとをを生あままににたたままししゆゆとといいひひめめのの糸いとをを引ひくくたたらら
一いははみみええ中ちゆう屋やりり〜〜ぐぐままぐぐにに右みぎのの二ふたととくくにに糸いとをを
引ひくくおお相あへへ出だすすああくくみみををささりり洗あららわわすす入い湯ゆをを母ははととて
引ひくく糸いとをを引ひくく

下糸引糸

○ホほああくく〜〜りりああははそのその糸いとをを用もちひひくく枝えだ葉はなりなりままをを引ひくく

よへ生^{あま}めてたきそをがらののさらし等^{びんご}分^{ぶん}に入^{いれ}にえ湯^ゆ
をうけたらうにちりさし〜〜上^{うへ}のすみたる
あつや^{あつや}を^をに^にて^てゆく^{ゆく}にあ^あさ^さく^く引^ひき^きて^てお^おま^ま同^{どう}ど
○上^{じやう}系^{けい}申^{しん}系^{けい}下^げ系^{けい}さ^さも^もに^にる^る時^{とき}中^{ちゆう}の^の密^{みつ}の^のあ^あく^くあ^あて
あ^あち^ちや^やい^いろ^ろあ^あち^ちろ^ろの^の初^{はつ}て^てた^たび^びも^もあ^あを^を密^{みつ}の^のあ^あく^く
あ^あを^をさ^さり^り浸^ひめ^めに^にて^て引^ひき^きて^て但^{たゞ}口^{くち}系^{けい}の^の内^{うち}始^{はつ}乃^な
あ^あめ^めて^て引^ひべ^べを^をあ^あづ^づく^くの^の系^{けい}に^にさ^さく^くあ^ある^る
から^から^らに^に系^{けい}色^{しき}悪^{あく}く^くも^も煉^{ねん}時^{とき}を^を煮^にき^き色^{しき}は^はあ^ある^るなり
○古^{ふる}蘭^{らん}新^{しん}の^のめ^めか^かん^{かん}心^{しん}が^がけ^け肝^{かん}要^{よう}也^や
○古^{ふる}の^の糸^{いと}福^{ふく}世^せの^のあ^あく^く煮^にて^てら^らの^のあ^あく^く色^{しき}こ^こあ^ある^ると
之^{これ}も^も大^{だい}概^{がい}右^{みぎ}に^にあ^あく^くる^る

糸^{いと}深^{ふか}煉^{ねん}あ^あく^くの^のり

○あ^あを^をこ^ころ^ろあ^あく^く〜〜あ^あひ^ひか^かん^{かん}殺^{ころ}す^す筋^{すぢ}り^りに^にえ^え湯^ゆも^もて
ゆ^ゆ〜〜あ^あく^く〜〜あ^あを^を煮^にて^て一^{いち}煎^{せん}程^{ほど}た^たけ^け内^{うち}練^{ねん}
べ^べ〜〜あ^あく^く〜〜あ^あを^を深^{ふか}色^{しき}に^によ^よめ^めて^てゆ^ゆ〜
○そ^そを^をこ^ころ^ろの^のあ^あく^く〜〜あ^あを^を煮^にて^てね^ねろ^ろ時^{とき}を^を糸^{いと}白^{しろ}〜
あ^あを^を色^{しき}ぬ^ぬる^るゆ^ゆ〜〜あ^あを^を色^{しき}ぬ^ぬる^るあ^あを^を色^{しき}ぬ^ぬる^る〜
練^{ねん}バ^ば糸^{いと}つ^つ〜〜仍^{いまだ}て^て紫^{むらさ}〜〜び^び色^{しき}紫^{むらさ}に^に深^{ふか}ろ^ろ時^{とき}は^はさ^さす^すあ
く^く〜〜粉^{こな}色^{しき}ぬ^ぬる^る〜〜あ^あを^を色^{しき}ぬ^ぬける^{ける}程^{ほど}ぬ^ぬれ^れ
時^{とき}を^を深^{ふか}色^{しき}〜
織^{オリ}属^{しゆ}の^の大^{だい}概^{がい}
唐^{たう}蘭^{らん}紬^{ちゆう}の^の織^{オリ}属^{しゆ}

○蝶の出がしを菓柄と云葉あくにて三日投つけ
 とみ出がし中より菜色のあがるなりを色を何
 度も洗ひあせりけさるゝその上洗ひあせり練ぬる
 かがんはあせり色ぬけ白色にならばよしをきつて出
 試に引てかがんを又煮べー系に引干ゆれば又煮
 べー出るなり
 ○煮べーより三揚志ぼりす肝要也あは志ぼりども
 志あつたけあるくらぬよ志ぼり糸あ引なり團の
 二〜川其上車にかゝるなり糸の細さぬとさ
 心かへぬる糸が引べー

丸の糸にゆきさめち
 右のひざにてゆりさ
 かけ右のこ糸に糸
 たを足入るなり
 糸ゆるやう團所
 糸ゆるやう團所
 糸ゆるやう團所



○糸よりかぐん、團研によりその慶のよるを手にて

織り仕るのり

○小麦の粉のりかぐんの粉糸百目め付或合こびの粉少く加へぬけり之振沖にたて常のりとの如

くめし織なり織あげあめつけ並付し織のりぬけるこその付つやをす是にて煮あめ

み返しとす又こあはして練あげふのりを突く絞し色白くなり唐え純固折也

○のりの仕るぬりも属し心そかぐんと並糸の引属しゆ一こ細く引で細くも糸つよ

そゆくに氣づくむ

雲綿に純和純め織属

○木あくし考づけ先あふこあくはてぬり

雲あはてぬりあくそとと常の雲綿の通りよ于て糸よ引たぬり糸の雲綿の如く

糸あがりこ糸百目にこいんの粉を合ぬりり七振入のりを加へ織属し帯の如し併雲綿よ

さらには于て糸よ引ゆへ毛出ておびの糸よかろ織めを毛をまめさ糸よりあがり雲帰入

志純しとより也毛出ぬり唐え純の糸引方に終り又毛出ぬり唐え純の糸引方に終り

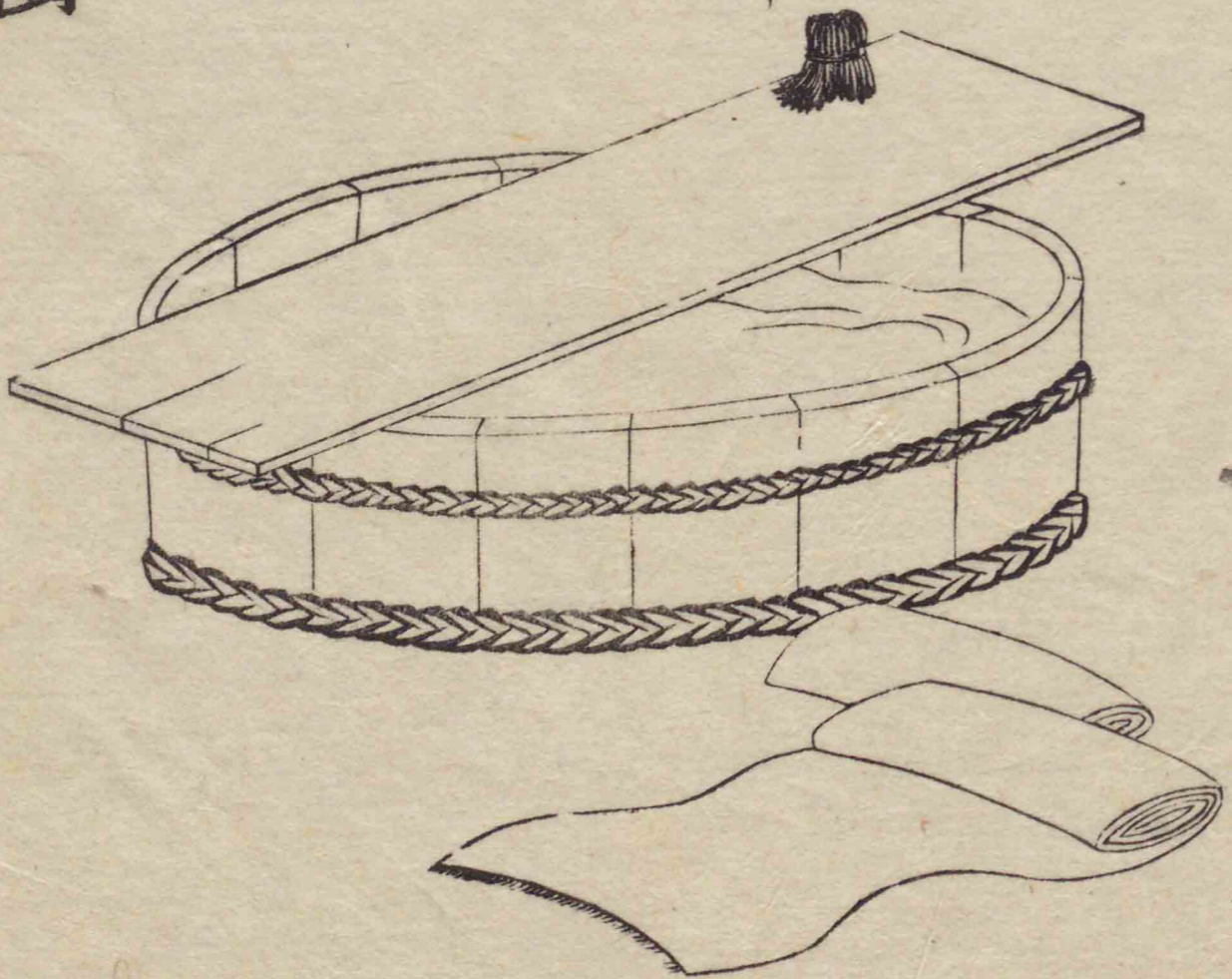
右圖の如く毛をみどかく出ほると付ぐぐぐ
 ちぐぐぐぐぐ毛の如く一層ぐぐぐ圖の如くして出
 べーぐぐぐめつけ毛織のつぐぐぐ一層ぐぐぐ地とありぐ
 織立毛と出ぐぐぐ

○堅糸を細くあらうと糸を織る
 四の助程をたよりの糸織る
 織なり糸よりかぐんすなりすなり織る

おろぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

もんぎりのよに
 板とつぎとあり
 だるにて樹あり

たいりぐぐぐ
 おんぐぐぐ



右 圓月画

下

上

○何れめよりらば堅糸横糸はよりをかくるゆへに
 横糸をむしりたるのち、四寸位にたよりあり
 ○よるもろりのかたんに唐糸横糸に横堅糸の糸位
 によらざるなり

○生糸糸は堅糸糸にうけてなり
 ○おろしぬくと又ゆるめるとちをゆる糸位によらざる
 かくべし

○おろしぬくのりうごんの粉斗にころし織上げ
 三日程おぼつけぬ
 ○色を織入たるを時を糸式筋にて色とよるなり

○卵の春暖候より前より外糸は通ぬ糸を織入き
 本糸芽出り候より糸をうけつしりゆに生さぬなり

○初生の時の草立程の首に枝を挿し小糠成り候より
 廣葉草の中尖り葉をうけつしりゆに遠まると果敢りたる
 且葉をうけつしりゆに

○草立の毛皮をうけつしりゆを好むゆへなり
 ○初夜候よりうけつしりゆの枝より葉をうけつしりゆに
 ののかり

○枝を挿しぬに挿しぬに大弁の首をうけつしりゆ
 事 是れなり
 ○根に挿しぬに挿しぬに水に挿しぬにたよりをうけつしりゆ

揚るなり河氷成凍るに松はよく
 ○ 晴ましく水も凍りてよく
 ○ 系はあはれにあり雲もいとお閑き
 ○ 系は口より吐くにけりばあはれに二筋を腮乃元より
 一筋とあはれにけり

○ 目をあまうのあり
 ○ 蘭を掛る際も一度下利するあり
 ○ 蝶の出入り必初末なり蓋せぬるは出るはまがに
 洞の力はよく先前末をけり新るはけりあはれん
 ○ 蚕もあはれ日数蘭に舞る日数在に空りけりあはれ
 ○ 雌雄はよくあはれの子の傍に居るは雌雄はよくあはれ

○ 蝶を一籠に多くするはよくあはれ
 ○ 卵の重目の日を過る減るはよくあはれ
 ○ 此はあはれに記せば水津の況もあはれにけり
 ○ 氏
 快くあはれに記せば水津の況もあはれにけり
 其理を思はれん人あはれんはあはれにけり

東京 木下勉之述

繪本大和錦

一名近代名家畫帖

初編 全三冊
二編 全三冊
三編 全三冊
近刻

玄對先生畫譜

山水部 全五冊
人物花鳥部 全三冊

名家畫譜

壹冊
壹冊

可菴畫藪

喜多武清筆

全一冊

是真先生畫譜

全三冊

狂齋先生畫譜

初編 全壹冊
貳編 近刻

繪本鷹爪

河鍋狂齋筆 初編 三冊
貳編 二冊

鶯邨畫譜

抱一上人筆

全一冊

1200

古今名馬圖彙

全三冊

山崎知雄輯
喜多武清画
繪本勲功艸

前集 全十冊
後集 近刻

長生舎主人編

金生樹譜

全三冊

卷 菱潭書

真行 千字文

全壹冊

此書ハ草木抄抄の培養室のなひ中う接木
田舎をわうかどと云ふ故て幸く是は又法
國の名木と云してその由て統々う系を愛
覧しめし人の必熟読しめべき書なり

松葉蘭譜 一冊
此書ハ松葉らん雲龍柳子より富言書
小はりすて名葉六十種の品あり
りて好む人の法読し得る

東京日本橋區通四町目七番地

書肆

金花堂

中村佐助



小野寺文庫

群馬県立図書館



0499773-0